

ことばからみた旧ユーゴスラヴィアの一側面

「セルビア・クロアチア語」をめぐる

中 島 由 美

一

インド・ヨーロッパ語族の中でも、スラヴ語派は系統的観点から見て相互に近親性の高いグループであるといえるが、ことに南スラヴ諸語間の関係は非常に緊密で、かつ地理的にも連続的に展開している。この領域に含まれる現時点での独立国家は、スロヴェニア、クロアチア、ユーゴスラヴィア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、マケドニア、ブルガリア、の六カ国であるが、これら国家の境界は言語特徴の境界と殆どの場合一致せず、諸特徴の地理的分布を知るためには、常に国境を越えた範囲を視野に入れる必要があり、南スラヴ諸語の分布域全体を、ひとつの連続的言語領域と捉えることも可能なのである。

この分野の研究者がしばしば好む表現を借りれば、仮にユリア・アルプスから旅を始めて南へ向かうとすると、黒海沿岸に辿り着くまでの間に、「コミュニケーションに支障を感じることなく」、次第に言語のかたちが移り変わってゆくのを体験できると想像される。実際に、この地域のスラヴ語を母語とする話者なら誰もが、同領域内の「どこへ行っても話が通じ」、「言葉は同じだ」と言うのを聞くことができる。

もっともこの旅程中にスラヴ語以外のことばを話す民族がまとまって居住する地域を通るとすれば、当然「コミュニケーションに支障を感じることなく」とはいかないだろうが、とりあえずここでは南スラヴ諸語の連続的分布にのみ注目することにする。

このように、いうならば「ひとつの言語の方言連続体」とみなし得るといえるのが、セルビアやクロアチアを含む南スラヴ圏の言語上の特徴であり、逆にいえば、それほどに互いの親縁関係が密であるということでもある。即ち、基本語彙について系統関係を証明する音韻対応が明確であり、かつ文法特徴の類似性が高いということである。ユーゴスラヴィアを代表する方言学者であったバヴレ・イヴィッチは、その主著のひとつ『セルビア・クロアチア語方言学』において次のように言っている。

セルビア・クロアチア語の言語領域は北西においてはスロヴェニア語、南東においてはマケドニア語、また東ではブルガリア語とその境を接している。これら四つの言語は南スラヴ諸語の分割し難い領域を成し、ユリア・アルプスやアドリア海から、黒海やエーゲ海の沿岸地帯まで広がっている。この領域は縦一二五〇キロメートルに対して、横三百キロメートルと、縦長の形をしている。⁽¹⁾

さて、ひとつの方言連続体ということ、この状況を

日本の場合と比較して考えてみよう。狭いと言われる我が国土であるが、北海道から与那国島までおよそ三千キロメートル、やはりほぼ南北に伸びるその領域内に、互いに系統的親縁関係の証明できることばが展開している。彼の地と異なって海という自然の境界があり、仮に北の端から旅して行くとすると、鹿児島から海上を下ってトカラ列島を越え奄美大島へ渡るあたりで言葉の違いが急に大きく感じられることだろう。そしてさらに南下するほどにそれが一段と顕著になって、古くからの土地の言葉を初めて聞くとしたら、意味を理解することが困難な状況に遭遇するかもしれない。列島三千キロの間には他にも東西方言の境界の如きものがあるし、また全国津々浦々に「山一つ越えると言葉が違う」といわれる所はたくさんあるが、「コミュニケーションの断絶」云々という基準でみるならば、この本土方言と琉球方言間の境界が最大の壁と言ってよかるう。両者の分岐は遅くとも奈良時代以前と推定されるのであるから、その懸隔は千三百年余の間に、双方独自の歴史・文化的発展につれて拡大したのである。

一方、南北の距離にして半分以下の南スラヴ語圏は、

(3) ことばからみた旧ユーゴスラヴィアの一側面

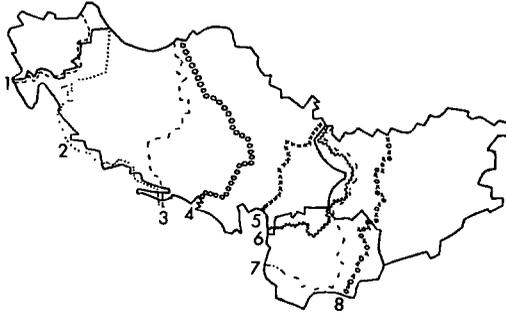


図1 音声的特徴についての等語線

- 1 *zg', *zd' > ž
- 2 *d' > j
- 3 *sk' > *st'
- 4 že > re (「できる」の現在形で)
- 5 母音に長短の区別なし
- 6 母音 ɛ, b の区別なし
- 7 *t' が *sk', *st' と同じでない
- 8 ヤツチの対応が e より広くない

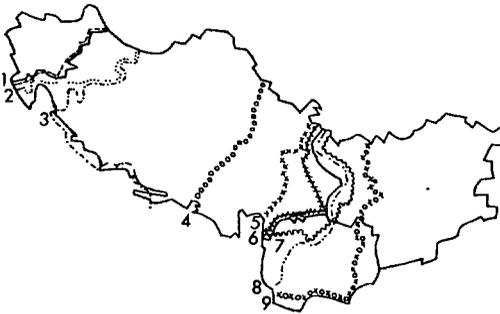


図2 文法特徴(形態論)についての特徴

- 1 双数の存在
- 2 疑問代名詞が kaj
- 3 男性名詞・1音節語の複数形の -ov- なし
- 4 人称代名詞複数形非自立形 ni, vi なし
- 5 総合的統語法
- 6 後置冠詞なし
- 7 動詞現在変化1人称・複数形の語尾 -mo
- 8 人称代名詞1人称複数 mi, mie
- 9 所有形容詞3人称・複数形が tehn- でない

cf. 図1, 図2ともに, 各等語線より西側に, 上記の各特徴が現われる.

面積では三六万七千平方キロメートル、我が国とほぼ同程度の広さである。北方のカルパチアとおぼしき方面からスラヴ人が南下し始めたのは早くて四世紀と推定され、七世紀頃までにバルカン半島の各地に定住したものとみられる。この地に到着する以前に既に複数のグループに分かれ、言語差が多少なりとも発達していたのかどうかは、詳らかでない。彼らが移住の途上残したスラヴ的地名の特徴から、何らかの方言分化を推定することも不可能ではない。しかしいずれにしても、九世紀に現マケドニア辺の口語を母体に成立した文語が、南スラヴ圏ばかりでなく、北方のロシア方面でも充分通用し、その後も書きことばのモデルとして機能したことからすると、スラヴ諸語の分岐は我が本土方言対琉球方言の場合に較べても、それ程早いことではないと考えられる。

片や日本本土では統一国家化が進行、中央集権体制が時代を迫って確立されてゆく。その中でことばの面から見た「地方分権的」事象といえば、江戸期の藩ごとの閉鎖的支配が各地の言語特徴の新たな発展を促し、いわゆる「お国訛り」を発達させたことが注目されるけれども、「書きことば」はほぼ一定の中心地から発信されてきた

上に、「話しことば」の方も最終的には今日我々の知る「標準語」が力を得、遂には琉球方言までを取り込むかたちで現在に至っている。

「古代教会スラヴ語」と称される先の文語は、スラヴ圏にとって初めての書きことばである。まずキリスト教文献翻訳のために登場し、正教におけるスラヴ典礼の言語となって、各地の特徴を吸収し形を変えながら、正教文化圏を中心に共通の文語の役割を果たした。しかし、その後外国勢力の支配下に置かれた南スラヴ圏では、これ以降地域のことばを母体とした文語は長らく登場せず、時代ごと、また地域ごとに影響力の強い他民族の言語が公用語として用いられるままに近代を迎えた。後にユーゴスラヴィアを形成する南スラヴの民が「民族語」による書き言葉を本格的に確立したといえるのは、だいたい十九世紀になってからのことであり、一番遅いマケドニアはなんと二十世紀半ばであった。その間地域の口語は外部からの影響を吸収しつつ、「土地ごとに」営まれていった。単純に言って高位の諸外国語対土地の言葉というダイグロシア的状况は、民族語を母体とする文化的ステイタスの高い「ことば」、或いは広い地域に通用する

標準語的な「ことば」を容易には確立させず、それ故スラヴ語研究者を狂喜させるような貴重な言語現象を、生のまま口語の中に残すことにもなった。この地域の基本的な言語状況はざっとこのようなものである。

セルビアとクロアチアのことばはどのくらい違うのか、といった疑問に答えることは容易ではない。日本語の状況と比較しても、もとより異なる地域の異なる言語の違いを比較する客観的基準があるわけではない。それでもこの地域に対する基本的認識のひとつとして敢えて言うならば、セルビア、クロアチアを含む南スラヴ人全体の間の言語差は、日本で「方言差」と称されるものと較べて、はるかに大きいとは言い得ないのである。

バルカンに紛争の火の手が上がるたびに、民族的多様性が複雑な背景として取り上げられ、民族アイデンティティの重要アイテムたる言語の独自性が強調される。しかしスラヴ語に限って言えば、このように言語的にはかなり緊密な関係にあるということを、まずは強調しておきたい。異なる「国家語」の数がますます増大してしまつた今日、各「言語」の違いが、あたかも歴史的に厳然

たる事実であったかのように論じられる恐れもあるからである。ただし、彼らには民族的一体感の拠所となるような統一的「文語」が育たなかった。スラヴ人同士なら「どこへ行ってもことばは同じ」という、話し言葉に対する民衆の素朴な意識は、各地の文化的異なりにもかかわらず脈々と生き続けたのであるが、社会的・文化的一体感を支えるようなことばは発達しなかった。より正確に言えば、作り上げようという意思は存在し、試みられたが、結局実を結ばなかったのである。

本稿では、旧ユーゴスラヴィア地域の背負った民族問題に分け入るひとつの道としてことばに焦点を定め、「セルビア・クロアチア語」と称された言語について、ごく大雑把ではあるが考えてみたい。「ことば」のかたちから出発するために、また方言研究を主たる研究領域とする立場から、日本では馴染みの薄い方言特徴に踏み込むこともあるが、お許し願いたい。その一方で、言語変化に当然関わる社会的側面に踏み込むことは、紙数の関係もあってできないが、それらについては歴史学等の優れた業績が我が国でも多数発表されているので、そ

ちらを参考にされたい。

二

「南スラヴ語域全体をひとつの方言連続体とみなし得る」という点について、もう少しその中身をみてみたい。3頁の図1、2は、先に紹介したパヴレ・イヴィッチによる地図である。ここには、南スラヴ語圏を走るさまざまな等語線のうち、特に重要なものが示されている⁽²⁾。

話が少し脇へそれるが、この図は彼の主著のひとつ「セルビア・クロアチア語方言学」において発表された。イヴィッチは南スラヴ諸語をひとつの方言連続体とみなすことの意義を、このように明確に示した最初の人間といえるが、この図示そのものは、母語による版よりも五年のドイツ語版において、より詳しく取り上げられている。しかも、五六年の母語版は長く再版されなかったため、方言学を専門とする学生や研究者を除けば、本国において一般の人々がこの認識に手が届く状況にはなかったのである。ユーゴスラヴィア政府は七一年に発表されたある著作⁽³⁾をもって、イヴィッチを特定の「民族主義

的傾向」の顕著な人物とみなし、彼を教育現場から追放して、「学問的」研究の場へと閉じ込めた。さすがに、海外に広く知られていた彼から学問研究の自由を奪うことは、西側世界に対して「自由主義」国家をアピールする政府にとって、得策ではなかったとみえる。セルビア人としての彼の民族意識がどのようなものであったかとはかくとして、地道なフィールド・ワークと記述研究を積み重ね、かつ多くの魅力ある仮説を提起した彼なればこそその業績も、国民に広く知られることはなかった。

やがて登場した政権によって特定の「民族主義」の標榜が国是となり、セルビアが世界の中で孤立無援の状況になって再びその業績に光が当たったのは皮肉なことである。しかも、連邦を揺るがすきっかけのひとつとなった公然たる大セルビア主義の標榜は、彼が閉じ込められたセルビア科学アカデミーが震源地のひとつとなって発信されたのだから⁽⁴⁾。

それはともかくとして、このような形でみると、南スラヴ語域の重要な等語線の多くは、北西から南東にかけて、領域を横切るように平行して走っていることがわか

る。また、こうした等語線によって区分けされる方言領域は、予想通り国家的（旧連邦当時のボスニアやツルナ・ゴラといった民族共和国も含めて）領土に対応するものではなく、ましてや宗教グループの異なりなどに対応するものでもない、ということも確認できる。

さて、この図において音声・文法特徴各々に関する等語線の束を考慮すると、連邦の領土を、およそ北のスロヴェニアと南のマケドニアにあたる地域、およびそれらを除いた地域の三つに分ける可能性が支持される。何のことはない、結局独立性の強い別個の「民族」の領域を除いただけではないか、と言われるかもしれない。しかしこの結論にはさまざまな意味がある。何よりもこのような提示の仕方によって、国、もしくは文化圏といった根拠でなく、「言語学的」に三領域が区別されると主張できる。（これら南北二地域が固有の言語を持つという意識だとして、決して長い歴史のあるものではない。）そして南北二グループを除いた残りの領域を、ままとまりのある、「ひとつ」の言語圏とみなす正当性を示すことができるのである。

その内容をもう少し詳しくみてみよう。

マケドニアを別個のグループとして立てるための大きなポイントは、何よりも文法特徴の等語線にある。セルビアとマケドニアの境界にはほ沿って現われる等語線の束のうち最も重要なもの、それは「総合的統語法」と「分析的統語法」の境界である。スラヴ語は古典的類型論上の分類で言うところの、「屈折タイプ」、即ち、名詞等の語尾変化が文法的機能を表示する、いわゆる格言語である。東のロシア語から西のチェコ語、或いはドイツ語圏に言語島として存在するソルブ語に至るまで、スラヴ語はこの点に関し保守的で、六個乃至七個の格を区別する。スロヴェニア、クロアチア、セルビア語は七つである。ところが、この等語線から東のマケドニア、ブルガリアでは、わずかの痕跡を残して格変化はすっかり失われ、分析的統語法に変わってしまった。この境界は従って、単に南スラヴだけでなく、スラヴ語派全体にとって大きな意味を持つものである。

（ついでながら、冒頭のバルカン縦断旅行だが、このように文法の特徴が違っていたらさぞかし相互の意思疎通に支障が起ころうと思いきや、基本語彙の共通性がものをいうせいも、全く問題ないと皆がいう。現に筆

者は、この等語線をはさんだ各地の出身者の間で、全く滞ることなく会話が進行する様をしばしば目撃する。)。

次に、音声面で同地域を他から区別する重要な特徴は、地図上では「母音の量的区別の有無」の等語線として現われている。即ち、この等語線から西側では母音に長短の区別があり、それはアクセントの種類に関係している。このアクセントには音の強弱とともにピッチ、即ち音の高低も関与し、例えばセルビア・クロアチア語が標準としてきたタイプでは、長母音、短母音それぞれに上昇調、下降調といわれるピッチの違いが現われ得る。一方東側の地域ではアクセントに関係するのは音の強弱だけで、ストレスの置かれる母音が自動的に他より長く発音されるので、母音の長短は意味の区別に関与しない。ピッチが関与する西側のアクセントは当該地域で独自に発達したもので、スラヴ諸語の中でも特異な性格のものである。このような発達のあった地域と、なかった地域とが明確に分かれるということは、この境界線を境としてそれぞれの口語の発達にかなりの独立性があったことを推測させる。

さて、西側の地域で同様に大きな意味をもつ等語線は、

「双数を持つかどうか」という、文法特徴に関するものである。数のカテゴリーとして単数、複数の他に「二つ」を区別することは、印欧祖語に推定される特徴として知られている。スラヴ派では、先に述べた古代教会スラヴ語はまだこれを保持しているが、現代諸語では概ね失われ、一部にその痕跡が現われるに過ぎない。ほぼスロヴェニアの領土にあたる地域の口語は、ソルブ語と並んでこれを現代まで伝えた貴重な例である。スラヴ諸語全体との関連において、双数を保存した地域の独自性を重視することには充分意味があるだろう。

このようにイヴィッチが示した等語線は、スラヴ語比較文法の枠組みの中で、スラヴ語全体の発達にとって鍵となる特徴を中心に選択されたものである。そのような根拠によって旧連邦領土からスロヴェニアとマケドニアを除いた残りの地域、それが即ち「セルビア・クロアチア語」域となるわけだが、その領域内を横切る等語線には、重要なものが二本ある。

その第一は、疑問代名詞「何」の形に関するものだが、実はこれはこの地域の伝統的方言区画の基準として名高

いものである。「何」という疑問代名詞として、この地方では「カイ」「チャ」「シュト」の三つが知られ、それぞれがまとまった分布領域をもつことから、三つの方言グループの名称として定着した。このうち「カイ」方言はザグレブを含むクロアチア内陸部に分布し、スロヴェニアにつながっている。「チャ」方言はアドリア海沿岸、及び島嶼部に分布する。最も広い領域を持つのは「シュト」方言で、ドゥブロヴニクを含むアドリア海南部からダルマチア、ツルナ・ゴラ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、そしてセルビア全域に広がり、さらにマケドニア、ブルガリア(音形は多少異なるが)につながっている。

イヴィッチはこれを「カイ」対「それ以外」に分類した。図2の2の等語線がこれである。「何」は古代教会スラヴ語では「チ」、及びこれに指示代名詞「ト」のついた「チト」として現われる。「チャ」は「チ」の母音(中舌のあいまい母音で、位置によって消失したり、他の母音に変わったりした)が「ア」に変化してできたものと推定できる。現に、当該母音はこの地域では一貫して「ア」に対応している。「シュト」の方は、指示代名詞付きの「チト」の子音が、後続のtの影響によっ

てシュに変化したものと考えられる。これもロシア語などに同種の例がある。これに対して「カイ」には、全く別の発達を考えねばならない。従って、スラヴ語の発達プロセスを念頭に置けば、「カイ」対その他に分けることにはやはり十分な根拠があるといえる。

もうひとつの等語線は「ヤッチの対応」に関するものである。「ヤッチ」とは、古代教会スラヴ語以来のキリル文字で用いられた母音字母「Ѣ」を指すが、これに対して現代スラヴ諸語でどのような母音が対応するかは、スラヴ諸語の発達にとってやはり重要なポイントである。この地域では、「エ」「イエ」「イ」という三つの交種があり、例えば「ミルク」はそれぞれ「ムレーヨ mljeko」「ムリエヨ mljeko」「ムリーヨ mljko」となる。たぐさんの語例に頻繁に現われるこの母音の違いは方言的特徴の代表格といえ、「何」による先の三方言のうち、特に「シュト」方言をさらに下位グループに区分する際の基準として知られてきた。イヴィッチはここでも三つの交種を「エ」より広くないか否か(母音の調音の問題としての広狭について)、の二つに分けている。二分割の根拠はここでは明らかにされていないが、音声的特徴から

いって「エより広くない」側の二つの変種をひとつにまとめることにはそれなりに根拠があるし、一方の「エ」側はブルガリア東部までの広い地域とつながることになるので、分布からいっても納得できる。

このように、「何」「ヤッチ」のどちらも、三つの変種が二つにまとめられている。等語線を設定するには二分割の方が明解であるし、また、構造主義言語学徒たるイヴィッチにとって二項分類が好ましかっただけかもしれない。しかしいずれの場合も、三分割では特定の民族的文化圏と方言グループが重なってしまい、どうしても「言語外」の背景が連想されてしまう。この設定に政治的配慮があったのかどうかはわからないが、実はこの二種類の方言的差異は、この地域の文語の統一問題に常に深く関わるポイントであった。この点について、「セルビア・クロアチア語」発展の頃に戻ってみよう。

三

「セルビア・クロアチア語」という名称は、「セルビアの」という意の形容詞 *srpski* と、「クロアチアの」という意の形容詞 *hrvatski* をつなげて、*srpskohrvatski* と

したものである。「セルボ・クロアチア語」と称されることもあるが、これは *Serbo-croatian*, *Serbo-Croate*, *Serbokroatisch* など、英独仏語等で、二つの形容詞をつなげた形を利用したものである。) この名称自体が後にさまざまな矛盾を象徴することになるのではあるが、その始まりは一八一八年の、ヴーク・カラジッチによる辞書及び文法の出版に遡るとされている。

カラジッチは、「ことはを同じくする」南スラヴの民が外国勢力の支配を脱して統一を達成するためには、民族語に基づいた統一的文語が必要であると考え、文語に相応しい正書法と文法を定め、語彙を確定するなどの業績を残した。彼はなるべく多くの民が利用可能な形を標準形とすべく各地の方言を詳細に検討し、「シュト」方言の「イエ」グループを選んだ。この選択は、ハプスブルグ帝国支配下においてドイツ語やハンガリー語の影響に脅かされ、南スラヴ人の統一達成を強く望んでいたクロアチア知識人にも歓迎された。その成果が、一八五〇年のいわゆる「ウィーン文語協定」である。続く統一国家成立に際して大きな意味をもつことになるこの協定は、連邦の立場からその意義が強調され過ぎたことを差し引

いても、充分に興味深い出来事であったといえる。以下、その意味を知って頂くために、多少長くなるが主要な部分を訳出し、紹介してみたい。

下に署名なしたる者たちは、「ひとつの」民族は「ひとつの文語」を持つべきであるという認識を共有し、かつ、我が邦においては文字についても、正書法についても、文語が統一無き状態におかれている事態を憂え、今ここに集って目下のところなし得る最良のかたちで文語について合意し、確認するために話し合ったものである。その結果、

一、諸方言を合成して、話者の存在せぬ新しいことばを作ることはせず、民族のことばたる方言をひとつ選び、それをもって文語となすことで意見の一致をみた。何故ならば、

イ 誰もが、自らの方言で読み得る形で書く、ということとは不可能である。

ロ 合成語というようなのは、人の手になるものである以上、神の創り給うた尊いことばより劣ることは明らかである。

ハ 全ての民族は、例えばドイツ人やイタリア人も、諸方言を合成して新しいことばを作ったのではなく、民族語のひとつを選び、それによって書物を著わしている。

ニ 次に我々は、南部の方言を文語と定めることが最良の選択であるという合意に達した。その理由は、

イ 最も多くの話者をもつ方言であること。

ロ 古いスラヴ語に最も近いことばである、それは即ち、他のスラヴ諸語に最も近いということでもある。

ハ 殆どすべての民謡はこれによって歌われている。

ニ すべての古いドゥプロヴニクの文学がこれによって書かれている。

ホ 東西いずれの信仰に帰依する者も、最も多くの文学者が既にこの方言によって書いている(皆がその規範のすべてに忠実というわけではないが)、等である。さらに次の点についても確認した。即ち、この方言においては二音節のところは「イェ」と書き、一音節のところは「イェ」もしくは「エ」、もしくは「イ」と書くこと。例えば、「ピエロ」「ピエリナ」「ムレージャ」「ドニオ」など。

もしも何人か(6)が、何らかの重要な理由により、我々が

ひとつの文語と統一のために最も相応しいと見なすこの方言で書くことを望まない場合には、残る二つのうち好む方によって書くが良からうが、ただしそれらを混交し、話者の存在せぬことばを作ってはならない。

……中略……

以上のように我々は合意したものである。もしもこれらの考えを神がお認め下さるならば、我が邦の文語上の大きな混乱が取り去られ、正しい統一に向けて一層の前進を達成できるものと確信する。

さればすべての文学者に対し、もし自らの民族の幸と進歩を望むならば、我々の考えに賛同し、自らの創作をそれに従ってなすよう望むものである。

ウィーンにて、一八五〇年 三月二十八日

ヴーク・カラジッチをはじめとして、私人としてはあるがこの協定に署名した者は全部で八名、うち五名がクロアチア、三名がセルビア出身者であった。この協定はまず「一つの民族にはひとつの言語」が必要との基本認識を掲げ、さらに具体的に言語の形を規定しているのだが、その「かたち」の決定におけるポイントは、先の

「何」と「ヤッチの対応」について、どの変種を選ぶべきかなのである。

ここで言われている「南部の方言」とは、シュト方言を指す。これを選ぶ根拠として、その分布域が圧倒的に広いこと、またクロアチアにとってもかつての先進文化地域であるドゥブロヴニクが、この方言形による文学遺産を残していることが挙げられている。しかし、この選択においては、ここに書かれていない別の理由も大きく作用したのではないかと思われる。ザグレブ文化圏にとって、彼ら自身の方言はあくまでも「カイ」方言であり、実際、条文にあるような「シュト」方言による執筆行為と並んで、「カイ」方言による文語構築の試みも行われていた。しかし、仮に新しい文語として「カイ」方言を選んだ場合、同じく「カイ」を基盤とするスロヴェニア語と区別されにくくなり、その影響を受けやすいのではないか……クロアチアの知識人にはそのような不安が強かったともみられるのである。

「自分たちだけに固有のことばのかたちを探すこと」、この地域の文章語の制定に際しては、常にこの問題がつきまとう。一九四五年にはじめて固有の文章語を制定す

るに至ったマケドニアは、その典型といえる。セルビア、ブルガリアという、より強力な民族集団に囲まれ、なおかつ「自分たちだけのかたち」を定めなければ、当時の人口にしてわずか百万強の弱小スラヴ民族の自立はかなわない。「ことばは同じ」スラヴ人同士、しかも長らく

「トルコ帝領の正教徒」というアイデンティティを共有してきた人々である。新生国家の国語の「設計」をまかされたブラジエ・コネスキは、ヴーク・カラジッチの「セルビア・クロアチア語」文法制定を手本としながら、周辺民族からできるだけ遠い中央地域の方言を選び、しかもいづれのスラヴ語からも区別され得る「独自の」かたちを文章語に取り入れるべく、事業を進めていったのであった。

こうした事態も、最初に述べた南スラヴ諸民族の言語的近親性故に生ずるものであることは明らかなだ。近代の民族主義はことばを重要なアイデンティティとなす。恐らくはそのふるさとが多民族国家オーストリア・ハンガリー帝国で、そこでは「ことば」の違いが個々のグループの違いの決め手であったからでもあろう。しかし宗教の違いが重要であったトルコ領のスラヴ人は、近代まで

言語の違いを今日のように決定的なものとは意識していなかったようである。ことばの違いが「違う国家」獲得の要件となった今、「同じことば」の中の「違い」を探してそれを独自性の根拠となすこと、それがこの地域の「民族主義」の特性となったのである。

それでも、「シュト」方言については何といってもその分布域が圧倒的に広く、また、先述のようにクロアチアの知識人たちの間に「シュト」が受け入れられていたこともあり、抵抗は大きくはなかった。しかし、「ヤッチの対応」の方はそう簡単にはゆかなかった。

カラジッチは三種の変種の分布を検討し、それぞれの音的特徴を考慮して、「イエ」を選ぶべきであると主張した。しかし、これはセルビア人、ことにハプスブルグ帝領のノヴィ・サドで言論活動を展開していた知識人たちの根強い抵抗にあった。彼らが文語のモデルとしていた「スラヴ・セルビア語」と呼ばれた言語は、ロシア語の影響の強い教会スラヴ語的な言語で、当然ながら古風なキリル文字を用いていた。従って彼らは「ヤッチ」をそのままの形で書き、これを「エ」と読んでいたのである。彼らにとってこれを「イエ」と綴るのがいかに困

難であったかは想像に難くない。しかも、カラジッチの提唱したキリル文字では、この綴りにラテン文字のjを使用するので、聖職者の抵抗も強かった。

ウィーン文語協定はセルビア人とクロアチア人の統一志向の盛り上がりによって支えられて成ったものである。特にクロアチアは地理的にも、また歴史的事情からも、アドリア海沿岸のダルマチア地方と内陸部及びその中間に位置する山間部の間に、さまざまな違いを抱えており、しかもハプスブルグ帝国の辺境にあって、先進西欧文化の強い影響にさらされていた。クロアチア知識人の間に展開した「イリリア主義」といわれる南スラヴ諸民族統合志向も、こうした背景に支えられたものである。しかし、クロアチア人もセルビア人も統一的な文語の必要性は認識していながら、具体的な「かたち」を定めるとなると、歩み寄ることにすら拒絶反応が起こる。同じことは連邦崩壊に至るまで、幾度となく繰り返された。「ヤッチの対応」をめぐる抗争は、その象徴といえよう。

北米大陸を代表する南スラヴ語研究者で、とくにセルビア・クロアチア語の記述研究から社会言語学的問題まで、あらゆる側面にその研究のエネルギーを注いだケネ

ス・ネイラーは、これ以降の「セルビア・クロアチア語」の運命について、次のような時代区分を設定している。⁽⁷⁾

- 一、一八二〇年から同五〇年まで——クロアチア人インテリ層には受け入れられたが、セルビア人の文化的上層部、特に聖職者からは拒否された時期。
- 二、一八五〇年から同七五年まで——クロアチア人、及びセルビア人の若者たちによる受容期。(ヴークの正書法がセルビアで公式に採用されたのは一八六四年)
- 三、一八七五年から一九二〇年まで——セルビア人、クロアチア人相方からの受容期。
- 四、一九二〇年から一九四〇年まで——ユーゴスラヴィア国家による受容期。すべての民族出身者にも概ね受け入れられた。(この時期、セルビア・クロアチア語はユーゴスラヴィアの公用語)
- 五、一九四〇年から一九四五年まで——クロアチア人による拒絶期。(主としてナチス・ドイツの影響による)
- 六、一九四五年から一九六六年まで——セルビア、クロアチア相方による、両民族に属する言語としての受容期。

(幾分の保留あり)

七、一九六七年以降——セルビア人とクロアチア人のための単一の文語との考えに対する拒絶期。特に、民族主義的傾向の強い一部クロアチア知識人による。(これに続き、八〇年代には特定の共和国——ボスニア、クロアチア、ツルナ・ゴラ、などごとに言語規範の確立志向が広がる)

カラジッチが恐らくは最も肝要と考えた「かたち」の面での統一は、結局その後真剣に顧みられることなく、「セルビア・クロアチア語」という名称のみが、統一の理想とヴーク・カラジッチの偉大性と共に、その信奉者に対しては神話として、非信奉者に対しては好ましからざる記憶として受け継がれるようになる。

二十世紀にはいつて訪れた新しい世界秩序は、「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国(第一次ユーゴスラヴィア)」を生む。「統一の理想」はここにも発揮され、「セルビア・クロアチア語」の一体性は概ね既成の事実と認識されており、焦点はスロヴェニア人のことばをどう扱うかにあったようだ。スロヴェニア人勢力

の中には、「スロヴェニア語を単なるセルビア・クロアチア語の方言のひとつとされるのは許しがたい」と主張する者が当然出現する。一九一九年の同国憲法は結局、新国家の公用語について、「公用語はセルビア・クロアチア語である。これは宮廷、国民議会、軍隊、及びすべての国家機構の言語である。スロヴェニアにおいてはスロヴェニア語が同じく国家の言葉とされる」のように定めた。⁽⁸⁾

この、統一精神と妥協の両方を受け継いだ第二次ユーゴスラヴィア(旧ユーゴスラヴィア)はスロヴェニア人とマケドニア人のことばを固有の言語として民族自立精神との折り合いをつけ、両者を除いたことばを「セルビア・クロアチア語」とすることで統一信仰を守った。しかしクロアチア側にくすぶり続けた不平等感や分裂志向を加速させ、言語的一体感は急速に失われてゆく。統一志向を支えたものが言語の一体性であった以上、分裂志向推進のためには、セルビアとの文化的差異、とくに宗教文化による異なりが強調されねばならない。分裂志向派は、連邦⇨セルビア主導の社会主義政権⇨封建的色彩の強い東方文化⇨正教文化圏、なる図式に対して、旧

ハプスブルグ帝国領¹¹自由主義的西欧文明¹²ヨーロッパの核を成すカソリック文化圏、という図式を自らのアイデンティティの柱とし、これが歴史的伝統であるという主張を強化してゆく。この路線に従ったセルビアとの言語分離政策は従って、「ヤッチ」に対応する音価や「何」の形といった方言差以上に、文化圏の異なりを反映する要素、即ち文字(セルビアにおけるキリル文字と、クロアチアにおけるラテン文字)と語彙の違いに集中して強化されたようにみえる。興味深いことに、語彙面でセルビアとの違いを強調するためには、その西欧志向とは逆に、よりスラヴ的なかたちを選ぶことになった。何故ならば、近代に入って新しい文物を取り入れる際に、ヨーロッパの辺境として常に強力な外国語の影響にさらされていたクロアチアは、外来の文化をその名称のまま受け入れることをよしとせず、スラヴ語に意識して導入することが多かったからである。一方トルコ圏のセルビアでは、西欧からの新しい文物はそのオリジナルの名称とセットで、新しい時代の象徴として受け入れられた。元来存在していた外来語をめぐる両者のこのような違いは、当然分離志向政策の好むところとなったのである。

先に紹介したケネス・ネイラーは、一九九二年、五五才の若さでこの世を去ったが、その遺稿の中で「今日のスラヴ世界において、言語と民族アイデンティティの問題がユーゴスラヴィアほどややこしいところはない」という言葉に続いて、同様の事態が世界中に拡大しつつあることを憂えながら、次のように述べている。⁽⁹⁾この原稿は紛争勃発直前の九十年頃、オハイオ大学において行われた講演の草稿として書かれたものだそうである。平和な時代にユーゴスラヴィアを深く愛するようになった者に共通の思いとして、事態の進展に対する驚きと悲しみがひとつひとつの言葉から、ひしひしと伝わってくる。この言葉を、仲間の誰からも愛され、親しまれ、かつ尊敬されたネイラーの遺言として紹介することで、本稿のしめくくりとしたい。

ドラゴリユブ・ペトロヴィッチが強調したように、ユーゴスラヴィア人たちは自らの言語的異なりを、民族の御旗、即ち他から自己を区別するためのしるしとしてしまった。言語を根拠に互いの区別を明確にせん

として、彼らは言語が第一義的なアイデンティティとみなされた十九世紀の伝統に逆戻りしてしまった。
……中略……恐らく諸民族は、互いの言語の違いが本質的に微細なものであることを認識して、だからこそ自らの独自性を失う恐怖に苛まれるのではないだろうか。

言い換えれば、言語が以前果たした統合の象徴としての役割よりも、グループ間の区別を加速させる役割の方がより強調されるようになってくるのだ。ここでは「ひとつの民族はひとつの言語を持ち、ひとつの言語はただひとつの民族に属する」という、ヘルダーのロマン主義的信仰への回帰が起こったのかもしれない。その原因はともかくとして、注意すべきは、このような言語ナショナリズム的傾向は、ともすれば政治家などのやからが自らの利害のために好んで利用するものであるということだ。

(1) Pavle Ivić, Die Serbokroatischen Dialekte I, Mouton, Hague, 1958, p. 26.

(2) 同右 pp. 31-32. また Pavle Ivić, Dialektologija srpskohrvatskog jezika, Matice srpska, 1985 (初版一九五六年), p. 16.

(3) Pavle Ivić, Srpski narod i njegov jezik, Beograd, 1971. (セルビア人とその言語)

(4) 「メモランダム」事件が有名である。柴宣弘著『ユーゴスラヴィア現代史』岩波新書、に記述あり。

(5) Zlatko Vince, Putovima hrvatskoga književnog jezika, Zagreb, 1978, pp. 279-280. (「ロマニチマ文章語の道程について」に採録されているものより訳出。)

(6) 同じく「二音節」とされているのは、長母音の場合、「一音節」は短母音の場合である。

(7) Kenneth E. Naylor, Vuk's Language and Literary Serboroatian Today, Hayчин Сачанак Слависта у Бркове Дане, 17, Beograd, 1987, pp. 114-115.

(8) Branko Petranović, Mornklio Zečević, Jugoslovenski Federalizam I, Beograd, 1987, p. 95.

(9) Kenet E. Nejlor, Sociolingvistički problemi Među Južnim Slovenima, Prosveta, 1996, pp. 29-30.

(10) ハッレ・イヴァーニチの高弟、方言学者。長らくノヴァ・サド大学において教鞭をとった。

(一橋大学教授)